断章

旭川のアイヌ語地名研究

154

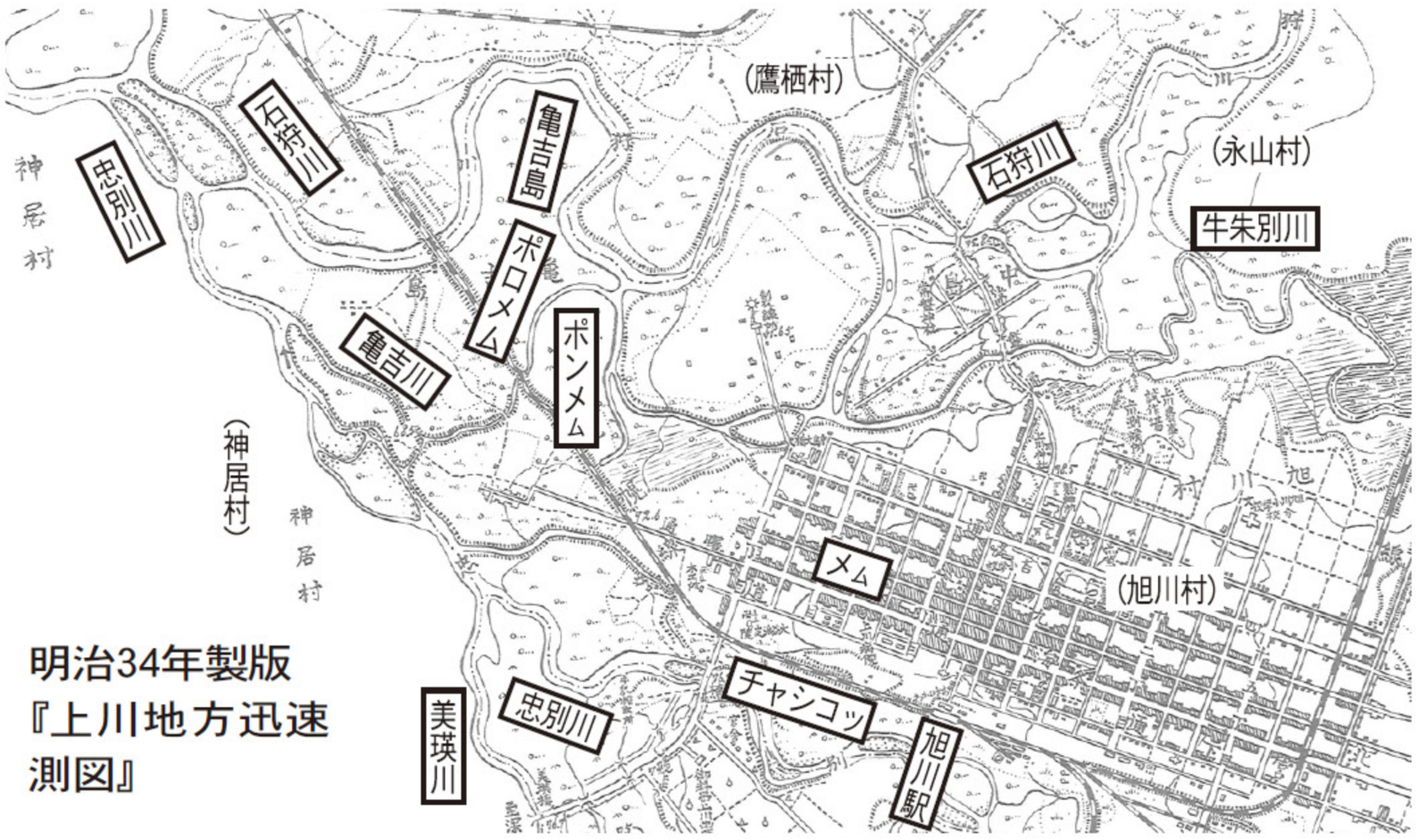
高橋 基

―チャシコツとメム…②―

今回の掲載地図は、明治三十三年測量、明治三十四年製版の第七師団司令部製版の『上川地方迅速測図』で、原図を八十%に縮小している。『新旭川市史第二巻』の口絵にも、道路・河川部分を彩色して使用している。この地図に、関連アイヌ語地名等を□に記して加えたものである。

【註――図中で旭川村となっているが、明治三十三年八月三十一日に、旭川町と改称。明治三十五年四月に、近文・近文台を鷹栖村から編入した。石狩川以北は、編入前で鷹栖村であった。】

掲載地図のチャシコツ(casi-kot砦・跡)は、明治三十一年に開通した官設鉄道・上川線(現・JR函館本線)の開通で消失するのであるが、この地図では、チャシコツの形状が毛羽(けば)で描かれていて、貴重な地図である。



明治34年製版『上川地方迅速測図』

掲載写真は、明治三十四年に撮影された初代の旭川駅である。駅前に小さな崖があって、かつては川が流れていた様子が読み取れる。このように、「道路新設当時には、一・二条の平和通りでも、多数の小橋がかけられていた。即ち現在の旭川市街にも、高台・崖・湿地・古川・小川が至る所にあった訳である」(『旭川市史第一巻』――第三章・地形)。

さて、松浦武四郎が安政五年(一八五八年)に、報文日誌の「東部登加智留宇知之(とうぶとかちるうち)誌」で紹介した、掲載地図の「メム(mem泉池)」では、老婆が飼育する犬、五六匹で、鮭を三十束四十束(六百匹～八百匹)位ずつ獲ったという。このように旭川は、松浦武四郎によって、鮭の大産地として紹介されていたのである。

その「メム(mem泉池)」は、市街地になって、往時の状況は見ることが出来ないが、往時を偲ぶような珍事を紹介したい。

「大正末期、二条本通りの道路の端を流れていた下水に、忠別川から遡って来た鮭が、四丁目あたりでも近所の人が捕えた事があった。」

これは、平成二年に発刊された、『旭川市開基百年記念事業記念誌――西地区百年の流れ』に書かれたものである。

同じ回想記には、「忠別川の橋の下では、鮭が群れをなして重なり合い、真っ黒になりながら遡上したものだ」と、付け加えられている。

右の記念誌には、また、忠別川の鮭に関して、次のようなエピソードも記されている。

「昭和二年頃、忠別川の堤防近くに住む、○○さんという男がいて、川に手作りの小舟を浮かべて、川を上ってくる秋味(あきあじ)(鮭)を棒で叩いては獲りあげ、四斗樽に幾つも漬け込んで、密かに売り出していた。」

年配の方なら、忠別川や石狩川での鮭の遡上の見聞談や、鮭の密漁の情報をご存知の方が多いと推察します。それくらい、往時は鮭の遡上は身近な話題であった。

ところが、旭川に鮭が上らなくなるという大事件が起こる。ご承知のように、深川市の石狩川に、昭和三十九年、花園頭首(はなぞのとうしゅ)工(こう)が出来たためである。頭首工とは、農業用水取水堰(せき)で、川を堰(せき)止めて、そこから農業用の水を取る設備である。堰の高さが七・三メートルあり、魚道もなかったので、鮭が上れなかったのである。平成十二年に上部三メートルを撤去し、右岸に幅四メートルの階段状の魚道を設けたために、旭川にも再び鮭の遡上が見られるようになったのである。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

明治34年撮影　初代旭川駅